

黒色綺譚カナリア派 第三回公演

犬華  
〜枯れぬ少年期〜

作 赤澤ムック

登場人物

吉雄 (ヨシオ)  
鉄雄 (テツオ)  
小四郎 (コシロウ)  
要子 (ヨウコ)  
三鈴 (ミスズ)  
馬麻 (マアサ)  
女犬 (オンナイヌ)

二〇〇四年九月 高円寺明石スタジオ

オープニング

原っぱにバラック小屋が立っている。

小屋の入口付近は、焼き鳥屋台を営む彼らの作業場。不衛生。肉が吊るされていたり、使い古しの串が山になっている。

開演3分前より三鈴が舞台上で小四郎を探している。

客席案内の真っ最中に役者が迷い込んだ感じで。

彼女の台詞が開演の合図だ。

三鈴　小四郎、どこへ行ってしまったの。姉さん、今日は大事な話があるから、昼にはいったん帰ってねと、言ったでしょうに

三鈴を気にもとめず、大きな袋を担いだ馬麻登場。

三鈴、馬麻の姿に怯えて移動。

吉雄と鉄雄が談笑しながら、三鈴を盗み見つつ登場。

女犬がほうほうの体で登場、舞台中央で倒れる。と、要子が静かに登場。

要子、女犬の顔を遠巻きに覗き込み。

要子　行き倒れだ

要子は女犬の足を持ち上げ、引っ張って移動。

最後の登場人物、エロ写真を手にした小四郎が駆け込む。

小四郎　この写真は、あの夢の寝台特急。これは刃、これはいつかの夕飯。楽しんでご

飯は食べられません！　：（エロ写真を掲げ）ついに発見、大阪発禁断の浪

花四十八手！　寂しい夜をお過ごし、兄さん方の手慰み、待ってましたの

この一枚。アンタの妄想焼き付けた、エロ写真がやってきた！

サイレンの音。

「僕は、若き頃を思い出すたび、見たこともない、こんな惨たらしい絵で記憶が止まる。あの人の暗示が、僕の若き時代を、本当に終わらせてしまったのだろう。ああ幻か、箱庭の自家発電」

第一場

吉雄が一人、バケツを前に座りこんでいる。

吉雄 血を洗い流して忘れていく事がある。俺は何を殺し生きながらえるのか。毎日毎日捌いては流れ出る獣の血。大丈夫か。いつのまにやらこの腕に、黒ずんだ痣、つくりやしないのかい。牛を捌き、豚や馬を捌き、それが無ければ野良犬を見つけて時たま。たまにじゃねえか。どうでもいいや、そんな事。とにかく俺は、こうして人様に食べさせる為に血で汚れる。大丈夫だ、そんな物を俺は決して食ったりしないから。でも犬よ、お前悔しくはないのかい。食べられる為に生を受けたわけじゃないだろう。気ままに道端歩いてただけだろう。もし、そう思うのなら、お前はいったい誰を恨む。殺したアイツか、食った奴らか、捌いて売ったこの俺か。…俺、お前の死骸としか会った事ねえのにな

バン！と包丁の音。身を縮めて肉を切る鉄雄がいる。

鉄雄 吉雄お、肉、足りねえよ

吉雄 じきに来る

鉄雄 こんなもんなら、昨日使い古しの串、拾ってこなくても良かったな  
週末だし、向こうさんも張り切って仕入れてくるさ

鉄雄 うん、そだな。一休み

吉雄 あいつは

鉄雄 さつきバタバタやってたから、もう起きてんじやないかな  
昼も過ぎだぜ

鉄雄 客相手に酒飲んでるから

吉雄 後始末してんの俺らじゃねえか

鉄雄 でも、おかげで売り上げも評判も良くなってるから

吉雄 本当かよ

鉄雄 要子の受け売りだ

吉雄 あてになんねえな

鉄雄 客足途切れてないよ、ここんとこ

吉雄 あんな馴染みなら、いらねえ。アル中のエロじじいどもが

鉄雄 おお

吉雄 品もなんもあつたもんじゃねえからな

鉄雄 おお、あつたもんじゃねえ

吉雄 人間それを無くしちゃおしまいだ。だから鉄雄、いくら腹が減ったってそんな肉、手出すんじゃねえぞ。(写真を取り出し掲げる) 鉄雄、どうだ眩しいだろ

鉄雄 (はしやぎ) まだ昼―

吉雄 エロ写真を昼の太陽にかざしてみれば

鉄雄 要子に見つかっちゃうよ―

吉雄 この笑顔でばかっとな開ききった股の向こうに何が見える

鉄雄 逆光でなにも見えね

吉雄 男の全てを受け入れる慈愛だ。彼女らは股開こうが何しようが、決して失われない堂々とした品格がある。たとえるなら鉄泉。女は鉄泉の花のようなのに限る。燐としてたおやか、高貴だのに手を添えなくなる可憐さだ

鉄雄 鉄泉

吉雄 要子ん家の庭に咲いてた

鉄雄 あのお嬢ちゃんは、そんななのか

吉雄 お嬢ちゃん

鉄雄 夕方になると市場を通り過ぎてく、ほら。声、かけてみたか

吉雄 かけられねえよ。俺なんか近寄ったら怖がるに決まってる

鉄雄 そうかな

吉雄 怖がらせたら、もう二度と会えない

鉄雄 会えないな

吉雄 しかも彼女は犬を飼っているようだ

鉄雄 犬か

吉雄 犬だ

鉄雄 まずいな

吉雄 見ているだけでいい。なにせあの子は鉄泉の花だ

鉄雄 すげえな

吉雄 少しはあいつにも見習わせないと

鉄雄 え

吉雄 要子。お酌しただけで、何もかも流れ出ちゃう女だから

鉄雄 ひでえな

二人が笑いあっていると、馬麻が登場。大きな袋を担いで。

吉雄 今日はまた馬麻さん、ずいぶんと重そうだ

馬麻 大量だったのよ。父ちゃんと朝からあっち側の川向こう行ってね、二人して、

いねえなあーってブラブラしてたらゴミ溜めに、群がってた、これ全部一箇所。父ちゃん張り切っちゃって。ちよつと詰め込み過ぎたかな、重かった

吉雄が金の用意をし、鉄雄が受け取った袋の中身を確認する。

馬麻 何匹か分からないよ、夢中でつめたから

鉄雄 痩せてんねえ

馬麻 太った犬なんかどこにいる

吉雄 捌く方の身にもなってくれ。あんまりガリばかりじゃ、うちのネタ全部つくねになっちゃう

馬麻 はいはい。お、色つけてくれたあ

吉雄 おじさんに宜しくな

馬麻 で、余り物は

吉雄 鉄雄

(取りに行き)

馬麻 しっかし疲れたね。ここんとこ小さい奴ばつかだから、腰かがめて走るだろ。

今日なんか興奮しすぎて、私ら何度転げたかしれない

おじさんは

馬麻 この金あてにして、(酒)ひっかけに行ってる

吉雄 馬麻さんも追っかけ？

馬麻 行くよ。吉ちゃん色つけてくれるんだもの

吉雄 なんだい、しな作っちゃって

馬麻 あたし、臭い？

吉雄 うあん

馬麻 言われちゃって、父ちゃんに。あの人さ、氷張るまで川で泳ぐの専門だからさ、犬とっ捕まえてはザブンで行水できるけど、私はねえ。子供に石投げられたくないし、吉ちゃんみたいな若い男に襲われても困るしねえ。いやだ、笑うとこだぜ、もう真面目な顔しちゃって、ぎやはははは。げふんげふん今度、要子の奴に連れてってもらえばいいじゃない

馬麻 え、風呂屋

吉雄 ああ

馬麻 嬉しいけどさ、番頭睨むよ、私入るとお湯、沼みたいに真っ黒だしね

吉雄 構うことないさ

馬麻 真っ黒っていえば、吉ちゃんここんとこ黒犬見かけたかい

吉雄 黒犬

馬麻 痩せた

吉雄 知らねえな。黒い皮が高いのかい

馬麻 そうじゃないんだけどさ

鉄雄 はい、軽いよ

馬麻 赤いね。買い叩かれるわ、このけんぴ

吉雄 文句はおじさんに言ってくれ

馬麻 だね。今度から毛皮の色みて捕りますわ。ま、こんなものかな（金を数枚返し）  
（こんなんじや鞆屋に怒られちゃうつと

吉雄 お土産（エロ写真を差し出し）

馬麻 ああ、喜んでたよ前のやつ。母ちゃんに似てるーって

吉雄 今度のは生憎の不細工揃い

馬麻 面食いだもんなあ。いいよ、父ちゃん女の裸なら何でも好きだから

鉄雄 これ、きてた（封筒を吉雄へ）

吉雄 また要子の母さんか

馬麻 羨ましいね、国の母ちゃんからの手紙だなんて

吉雄 よかないよ

馬麻 産んだつきりサヨオナラよりいいでしょ

吉雄 違うんだ。これが来た日の要子は荒れる

馬麻 あら。じゃあ私はそろそろ。要子ちゃんにさ、機嫌良い時にでも、風呂のこ  
と聞いてみて頂戴ね。あ、変な顔したらいいよ、まあ別に構っちゃないんだ  
から私も

吉雄 聞いておく

馬麻 ありがとうね

馬朝は退場。

作業場奥、要子が鉄雄を追い立てながら登場。

要子 （鉄雄へ）そんなもん破いて捨てていいの。どうせ帰って来い、帰って来ーい  
って、そればかりなんだから

鉄雄 でもさ、読まずに捨てたら俺が顔向けできねえよ

要子 鉄雄は顔向けしなくていいよ。うわ、肉屋さん来てたでしょ、臭いがする

吉雄 嫌なら帰れよ

要子 帰らないもん（手紙を読む）

鉄雄 なんて

要子 なに

鉄雄 それ

要子 姉さんが赤ん坊産んだって、男の子。立派なもんよね、ちゃあんと男の子産み落とすんだから

吉雄 一度帰ってやりやいいだろ、甥っ子の顔見にでもさ

要子 いや

鉄雄 おばちゃん可哀想だ

要子 うるさいな。じゃあ吉雄、あんた私の亭主だっついてきてくれる

吉雄 ばか

要子 私は吉雄のお嫁さんになりに来てんのよ

吉雄 お前、小娘みたいなこと言ってるんじゃないぞ。鏡見ろ、鏡

要子 あの町で母さん、息苦しくて筆をとるんだ。太陽の日差しが不躰でさ、容赦なく照らされて辛いだよ。安物トラックが真つ黒な煙吐き出し行ったり来たり。母さんもあの町の中で行ったり来たり。出られるってこと気付かないフリして、私に手紙出すなんて、あてつけよ

吉雄 帰る家あるだけ、ありがたいと思えよ

要子 吉雄と一緒にやなきや帰りたくないの

吉雄 店どうすんだよ

要子 鉄雄、やっぱりこいつは男色だね

鉄雄 おおい

要子 こんな良い女目の前にしてさ

くわえ煙草の小四郎登場。

小四郎 毎度どうもお邪魔します。姉さん真昼間からお美しいこと

要子 はいどうも

要子、するりと奥へ退場。

吉雄 (煙草) 俺にもくれよ。どうした、真昼間から目の毒売り込みに来たのか

小四郎 そう、股透き通る東北女！…って言いたいとこなんだけど、今日はちよっと類が違って

吉雄 なんだよ

小四郎 昨日の夜、あんまり売れ行きがいいもんだから。凄かったんだぜ、あの市場外れの河川歩道で。ちよっと兄さん二組、こっちの兄さん三組、はたまた兄さん五組って飛ぶように売れちゃって。気付いたら膨れ上がったポケット

が。ぺちゃんこ。五組買った旦那には俺も驚いた。そんなに買ってお体大丈夫  
って

吉雄  
で

小四郎 こんな調子のいい日はそうそうないなと、俺も欲を出して、無くしちゃまった  
売り物仕入れに行ったんだ。エロ写真作成工場、秘密のアジト。でもほら、  
仕入れて言っても、俺そこらからかっぱらって売ってるだけだろ。普段なら  
夜には絶対行かないのにさ、それがいけなかったあ

吉雄  
見つかったのかい

小四郎 ちらっとね。あそこじゃ腑抜けの日和学生しかいないし、どうにか逃げ延び  
たと思ったら、さつき。いたんだよ、その男が、大通りでさ、俺の顔見るな  
り「あつ」って叫んで追いかけてきやがった。お互い一人だったのが救いで  
す

吉雄  
ああ、追われてんのか

小四郎 そうなの、ちよつとかくまっておくれよ兄さん。ほら、こんな物でよければ、  
いくらでも、どうぞどうぞ（写真束を差し出し）

吉雄  
太っ腹だね珍しく

小四郎 ああ、昨日仕入れたのはゲンナリするようなブスばっかだったから。こんな  
の売っちゃ信用に傷がつく

吉雄  
本当だ。炭の足しにでもするよ（金を差し出し）

小四郎  
いらんないよ

吉雄  
とつとけよ。こんな写真で恩着せられても具合が悪い

小四郎  
着せないって

吉雄  
いいから

小四郎 そうお。もう、強い男。あんな美人がいながら、俺の写真まで買っちゃうな  
んて

吉雄  
美人

小四郎 ああ、要子姉さん。俺の姉ちゃんには負けるけど。今日もまた低血圧？

吉雄  
へえ、お前の姉ちゃん美人なのか

小四郎  
とびきりだぜ

鉄雄  
想像できねえな

小四郎  
いたのかよ、後ろから気味の悪い奴！

吉雄  
その姉ちゃん、びっくりしないのかい。お前がこんな写真売ってて

小四郎 知らないもの。あの人はなーんにも知らない。今までも、そしてこれからも  
知ることはないだろう。へへ。んで、いつか金がまとまったら、それ持って  
質問には一切答えず姉ちゃん連れてこの町を出るのさ。あの家を出るのさ

吉雄 できてるのかい、姉ちゃんと。やるね

小四郎 なわけないだろ。兄さん方にかかると思えが低俗になっていけねえな。俺はただ、あの人がこの町を嫌ってるのが分かるんだ。あの家を、父さんのもとから離れたがっているのは分かる。年、あんまり離れてないんだけど、俺んとこ早くに母さん出てったから、姉ちゃんが母さん代わりだ。その人が辛そうにしているの毎日見るのは心苦しくてね

吉雄 商売道具変えりや、もつと泣かせる話なのに

小四郎 昼間工場続けながら金を稼ごうと思ったら、これぐらいしかねえの

鉄雄 偉いね

小四郎 俺の志、お前に誉められたかないよ

吉雄 鉄雄、お前も三度に一度は買ってやれ

鉄雄 (笑って手を横に振る)

吉雄 人助けだ

鉄雄 お、俺は、いーよー

小四郎 大人のくせに意気地がないね

鉄雄 いらねーもん

小四郎 不能だ

吉雄 好きな女ぐらいいるだろ

鉄雄 俺なんか、そんな、罰あたっちゃまうよ

吉雄 いるんだろ

要子 (舞台外より) 坊や、また昼飯目当てで来たんだろ。私、これから朝飯よ

小四郎 人聞き悪いなあ。いただきますよ、昼抜きで追いかけてっこだったんだから。

兄さん方は

吉雄 俺らは昼は食わないんだ

小四郎 そっか、じゃあ御相伴に

小四郎、いそいそと奥へ退場。

鉄雄 なあ吉雄

吉雄 なんだい鉄雄

鉄雄 もう少し優しくしてやれよ

吉雄 アイツの方から突つかかってくんだよ

鉄雄 そうかなあ

吉雄 ああ

鉄雄 俺、やっぱり要子は、お前に会いに村出たんじゃねえかと思うよ

吉雄 そんなわけねえだろ。転がり込む為の口実だよ  
鉄雄 そうかなあ。そう思うんだけどな

鉄雄は足元の蟻を踏み潰し、つまんで捨てていく。

鉄雄 健気じゃねえか

吉雄 なにしてんだ

鉄雄 肉。狙ってやがるから

吉雄 蟻か。…放っておいてやりやいだろ

鉄雄 食われちまう

吉雄 お前、好きな女いるだろ

鉄雄 いねえよ。お、こいつら見せつけがましく働いて。いくら殺してもどんどん

出てくる、まるで俺にや無関心だ（蟻潰しに夢中になり）

吉雄 やめろよ

鉄雄 吉雄も見ってみろよ、何も怯えてないよ、こいつら

吉雄 （大きな作業音を出し）仕込みしよう

鉄雄 ……………

吉雄 なんだよ

鉄雄 （うつつて変わり明るく）するよ、仕事するよ、たくさん働いて、早く俺達の店、

持つんだもん。屋根つきの、城、吉雄、俺、裏の肉分けてくる

吉雄 お、おう

鉄雄 蟻んこ

吉雄 うん

鉄雄 ……入ってきたら踏み潰すんだぞ。俺らの大切な肉、あいつら食い尽くす気な

んだから

鉄雄とすれ違う要子は、女犬を連れている。

鉄雄 なにそれ

要子 可愛いから拾ってきた

鉄雄 また（笑う）

要子 食わせてやるんだ

鉄雄 え、え、え（笑う）え

要子は鉄雄を気に止めず女犬を閉じ込め、吉雄のもとへ。

鉄雄は奥へ退場。

要子 どうしたの

吉雄 いや、別に

要子 あ、そうだ。なんかここんどこ、焼き鳥食べながら首かしげてる客多いのよ。特に精肉食べる奴。だからさ、つくねを増やしておいて

吉雄 疑われるってんなら、焼きながら吐きそうにすんのやめろ

要子 大丈夫よ。涙流して「妊婦なんです」って言ってるもの。お客さん、つわりと分かると顔色変えて注文増やすのよ。みんな生き別れの奥さん思い出すんでしょねえ…。なによ、じゃあ吉雄はその肉、食べられる

吉雄 食えるか、こんなもん

要子 でしょう。ああんざり。堅気のダンサーにでもなればよかった

吉雄 無理だろー

要子 ねえ吉雄

吉雄 うん

要子 ねえったら

吉雄 なんだよ

要子 考えてくれた

吉雄 なんだっけ

要子 金かき集めて店を開く話。市場の屋台なんかじゃなく、ちゃんと二階に部屋のある所に引っ越そうって。考えておくとって言ったじゃない

吉雄 ああ、あれか

要子 連絡とれたのよ

吉雄 どころ

要子 学校の頃の友達、千恵子、覚えてない。その子のお兄ちゃんが今、前にあんならにいた屠殺場にいるね、大丈夫だって、仕事あるって

吉雄 また俺達に解体戻れって話か

要子 違うわ、あんたは私といて

吉雄 話がうまく読めねえなあ、要子

要子 鉄雄、田舎帰った方がいいよ。東京は合わないもの

吉雄 あー、そっか、そういう話か

要子 だってあいつトロいし、鈍感だし、手先だって器用なわけじゃない。でも向こうじゃ気に入られて働いてたっていうし、ね

吉雄 そうそう、あいつ捌くのは俺より早いんだ。何度競争したって勝てなかった

要子 ならさ

吉雄 俺は三人でいいけど

要子 どうして

吉雄 お前が転がり込んで来たんだぞ

要子 私と二人なら、きつともつともまくいく

吉雄 なんだよ女ぶりやがって

要子 家出仲間ってそんなに大切

吉雄 それだけじゃねえ、肉捌くのは相棒がいる

要子 他の人を雇えばいい、一から教えてやってさあ

吉雄 要子

要子 ね、疫病神は田舎に返して

吉雄 お前まで向こうの奴らみたいな呼び方するな！

要子 ごめん。でもさ、幼馴染より自分に惚れてる女を大事にしてくれた方がいい

吉雄 じゃない、もう私ら子供じゃないのよ

要子 惚れてる？ お前が俺に。冗談だろ

吉雄 冗談じゃないよ、馬鹿、惚れてるよ、だから心配してるの吉雄、あんたの事！

要子 こんな所で犬捌いて、そんな焼き鳥だか焼き犬だか判らないものこさえて、

吉雄 人様を騙して屋台引いて楽しいの！

要子 やめろよ、今夜の分の仕込みしてんだ

吉雄 あんたは犬に串刺したくて、あの町捨てたのかい

要子 なら、お前は俺をどうしたい

吉雄 まつとうに

要子 今更、ここで、まつとうかあ

鉄雄が所在なさげに登場。

鉄雄 …あ、昨日の残った犬さ、内臓、痛みが激しくてさ、今夜はホルモンやめよ

吉雄 うかと思うんだけど、どうする

鉄雄 どうかな。お前ちよつと休んでろよ、俺だけ休憩しすぎちまった

吉雄 いいよ、いてやれってここ

鉄雄の言葉を聞かず、吉雄は奥へ退場。

要子と鉄雄、しばしの沈黙。小四郎が登場。

小四郎 ご馳走様です毎度毎度。成長期終わらなくて

要子 いいのよ、うちには大飯食らいがまだ一人いるから

小四郎 え、(鉄雄を見やり) ああ

要子 ねえ鉄雄

鉄雄 あ、ああ

要子 よくもまあ、こんな所で一年。知ってたかい、私がここに来てもう一年

鉄雄 そうなのか

要子 長かったねえ

鉄雄 楽しかったから長くねえ

要子 長いよ、一年と思うと虫唾が走る。今日は早めに店出すからね、さっさと作業終わらせるんだよ

要子、奥へ退場。

鉄雄 (何度もうなづいて見せ)

小四郎 おつかねえ(焼き鳥を食べる)

鉄雄 いいや、おつかなくねえ

小四郎 この変態(笑う)

鉄雄 うまいか、それ

小四郎 笑うな、気色悪い

鉄雄 あい、すいません

小四郎 …まずいよ、まずいよこれ

鉄雄 そうか、まずいか

小四郎 腹が減ってなきや食べねえな

鉄雄 へへへ

馬麻が登場。

馬麻 あ、まだ仕込みしてる

鉄雄 吉雄(と、声をかけ)

馬麻 あら珍しい、知らない人(自分の臭いを嗅ぎ)

小四郎 (ひらりと馬麻から距離をとる)

吉雄 (焼き串を手に) どうしたの

小四郎 どちら様

吉雄 肉卸しの馬麻さん。さっきの肉ならもう手遅れだ、捌いちまってる

馬麻 違うの。吉ちゃんここで色つけてもらったから、今日は終いにして父ちゃん

河原でいつもの行水始めてたんだけどね、川向こうに驚きのデブ犬歩いてて  
小四郎（反応する）

馬麻 でも父ちゃん酒入ってるし、私も泳ぎは得意じゃないから

小四郎（馬麻の袋の中身をこっそりと確認する）

馬麻 なによ。でね、とにかくすすったもんだで、はい。捕まえたよ今年一番のデブ

小四郎、吐き気をもよおして退場。

吉雄 どうしたんだ、あいつ

鉄雄 さつき、焼き鳥食った

吉雄 馬鹿だな

馬麻 私を馬鹿にした罰だ

吉雄 根はいい奴だぜ

馬麻 鼻がきかなきゃね。で、今日の今日でどうかと思ったんだけど、吉ちゃんとこ払いもいいし、父ちゃんもさつき言われたこと気にしてたから、どう、名誉挽回のデブ、あげるから良い精肉に仕立ててよ

吉雄 これならたくさんとれる

馬麻 でしょ、良かった。腹開いたら水出てくるよ、こいつ最期にや溺れてたから

吉雄 一匹

馬麻 一匹だよ、こんなデブツチョそうそうお目にかかれません

吉雄 もっといいいの、こんなデブ

馬麻 父ちゃんと私が目、見開いたのよ

吉雄 これだけ太ってんだ、仲間が痩せてるとは思えないだろ

馬麻 そうかもしれないけど。父ちゃん、もうグツタリしてるし、私一人じゃ追い詰められないし

鉄雄 俺、行くよ。おっさんの代わりに走る

馬麻 え、悪いよ。鉄ちゃんに走らせるなんて

鉄雄 追いつくまで逃がさないもの

馬麻 あんたねえ、思ってるより大変なんだよ。相手、野良だかんね、噛み付いてくるよ、集団だったら返り討ちだよ、いいの  
いい

吉雄 連れてってやってくれないか

馬麻 毎回色つけてもらってるもの断れないよ、風呂にも連れて行ってもらいたいし。父ちゃんに聞いてみる。鉄ちゃん行こう

鉄雄 デブならさ、足遅いんだろ。俺、道具使わないで絞めるよ

馬麻と鉄雄は退場。

吉雄は、見送りついでに小四郎の様子を見る。

小四郎（びよこたとんと登場）

吉雄 大丈夫か

小四郎 なわけないでしょ犬食わされて

吉雄 自分で食ったんだろ

小四郎 前々からこの肉は怪しいと思ってたけど、鬼！

吉雄 おい要子、めかしこむのもいい加減にして、坊やの介抱してやってくれよ。

調子にのって焼き鳥食っちゃったんだとき

小四郎 いいってもう

吉雄 うまかったか。人気あるんだぜ

小四郎（吐き気をもよおし）

要子 なに、可哀想に。食べちゃったの

吉雄 らしいよ

要子 そんな苦虫噛み潰した顔しなくなつて、肉は肉なんだから。每晚何十本と売れていくのよ、みんな食べてんの。どうって事ないじゃない

吉雄 よく言うね

要子（吉雄を目で制し）全部吐ききつた。なにせ野良だから、しっかり焼いても腹下す客いるからね（と、置きっ放しのエロ写真袋に気付く）…なあに

小四郎 なんでもねえよ

吉雄 よせよ

要子 男二人で躍起になつて。ゲボ見られるより恥ずかしい事ってあるの

小四郎 俺の商売道具だ

要子 あんた何屋さん、何屋さん何屋さん何屋さん

吉雄 もういいよ、見たきや見ろ

小四郎 でも兄さん

吉雄 どうせ力づくでも見るんだ

小四郎 でも

要子 じゃあ仰る通りに力づくで。写真、…まあ綺麗な野菊がたくさん

小四郎 売ってないよ、兄さんいっつも買ってこないんだぜケチでしょう

要子 あんたは黙ってな！

吉雄 なんだよ。こんな写真の一枚や二枚、男なら誰だって

要子 ブスだ。あんまりだ。こいつらブスじゃないか！

吉雄 美人の時もあるんだぜ

要子 ブスの写真は買うくせに、生身の私に興味がないってどういう事。不能野郎、なるほど写真で一人でマスクかいてたわけだ

吉雄 お前、女のくせによー

要子 鉄雄も一緒にやってたの、あんたらそういう仲なわけ、うんざりするよ何もかも、この肉、肉、肉！

吉雄 犬、犬、犬！ あははは

要子 馬鹿！ もっとマシな商売ないのかよ

吉雄 なにすんだ

要子 このオカマ野郎！

要子は奥へ退場。

小四郎 ご愁傷様です

吉雄 ああ

小四郎 やだね。ヒステリー。アンネ？ 夢見がちな若人の夢壊さないでよ

吉雄 夢見るなら手の届かないくらいの子でいいんだ。この写真の女たちのように

さ

小四郎 夢見てんの、それに

吉雄 昼のうちは見なくていい。見えなくて、そんなもん、きつとき

馬麻と鉄雄が登場。

馬麻 参ったー

鉄雄 まだ何もしてねえよおう！

吉雄 おう、どうした

馬麻 デブ軍団は見つかっただけど、鉄ちゃん興奮しすぎて騒ぎになったから一時退却だよ

鉄雄 凄かったぜえ吉雄、一緒行こう

吉雄 あはは

馬麻 アンタ、男だね。父ちゃん超えてた

吉雄 鉄雄はすげえんだ

馬麻 仕切りなおして、お祝い捕りに行ってくる

吉雄 お祝い

馬麻 要子ちゃんとの一周年なんだろう

要子 うるさいわね、感傷にも浸れないじゃない！

馬麻 おめでとねー、夫婦の記念日

要子 はあ

女犬 これ以上やめて

馬麻 犬？

要子 オカマと交わす契りってどんなよ。鉄雄、なにその汚い格好

吉雄 犬と格闘してきたんだ

要子 馬鹿か。なんでアンタが犬殺しすんの

鉄雄 ごめん

女犬 やめて

吉雄 謝ることねえぞ、もういつちよ出撃だ

小四郎 いっそ商売変えすりゃいい

鉄雄 えええ（照れる）

馬麻 そうだよ鉄ちゃん、私ら二人で組もう

吉雄 駄目だよ馬麻さん

要子 楽しそうに馬鹿話してんじゃないよ、やりゃいいじゃない、馬麻さんに連れて帰ってもらいなさいよ。せいせいするわ、この家も少しは綺麗になるんでしようね、ああ嬉しい！

鉄雄 ごめ

吉雄 謝ることねえってば！

要子 なによ、正直に言っただけじゃない。うんざりなのよ、誰も彼も、私のこと苛立たせる事ばかりして、少しはまっとうにしてられないの！

女犬 ここから出して下さい

泣き崩れる女犬。要子が暴れだし、皆は慌てふためき。

静かに静かに三鈴登場。

三鈴 ごめんください

吉雄、誰よりも先に三鈴に気付き彼女を凝視。

三鈴 あの

要子 誰だお前、誰よ！

要子、三鈴を突き飛ばす。よろけ膝をつく三鈴。

三鈴 弟が、ここへ入って行ったそうで。…弟、小四郎といひます

三鈴、吉雄の視線に気付き、彼を見つめ返す。

吉雄 鉄泉の花だ

小四郎 姉ちゃん

三鈴 小四郎…？

暗転。

第二場

派手な音楽が流れ、一人踊っている要子。

要子 田舎を飛び出して、私、しばらくは毎晩踊り明かした。ダンスホールには思  
い描いてた通りの東京が、私に肩ぶつけないながらひしめいてた。ねぐらはその  
晩に出会った男の部屋、連れ込み宿、車の助手席。運が悪けりやタダ乗りさ  
れて。金。貰ったさ。その日一日生き抜くために

作業場。鉄雄がのったりと登場。

要子は構わず踊るが、疲れて酒を飲む。

要子 あの子、坊やの姉さんだって

鉄雄 あ、あいつどこ行ったんだろ

要子 姉さんねえ

鉄雄 捕まったかな

要子 なに

鉄雄 うん。要子の犬、騒いでたな。俺らが仲間殺してるって勘付いたのかな。畜  
生同士でも悔しいもんなのかな

要子 あの子みたいな女なら、吉雄も喜んで触るのかしら

鉄雄 え

要子 いつからの知り合い

鉄雄 知り合いのわけねえよ

要子 もう屋台出しちやおつか

鉄雄 (出さなくて) いーよお

要子 だらしがない (着替えを始める)

鉄雄 (見ないように目を隠す)

住居部分に、吉雄と三鈴が二人。

吉雄 …… (鼻をすする)

三鈴 (ちらと吉雄を見る)

吉雄 小四郎

三鈴 はい

吉雄 帰ってこねえな。ね

三鈴 ええ

吉雄 たくさん稼いで、君をこの町から連れ出すって  
三鈴 え  
吉雄 言ってた  
三鈴 そう。…なあに  
吉雄 いや、別に  
三鈴 犬、食べるのね  
吉雄 (首を横に振る)  
三鈴 食べないの  
吉雄 俺たちは  
三鈴 そう。内緒だけど  
吉雄 なに  
三鈴 私、あの犬たち、餌付けしていたの  
吉雄 え  
三鈴 丸々と太った犬  
吉雄 ああ  
三鈴 もう捌いてしまった？  
吉雄 そっか、だからあんなに太ってたのか。君の犬だったんだ、知らなかった。  
三鈴 知らないで。デブ犬珍しいからね、ごめんよ  
吉雄 もう、いいの  
三鈴 悪気はないんだ  
吉雄 (笑い出す)  
三鈴 馬鹿にしちゃいけない。俺だって、田舎はあっても親は無しだ。一人で食っ  
吉雄 ていかなきゃいけないってのは、君が思うよりも  
三鈴 あの犬たちに、私は何をさせようとしていたでしょうか  
吉雄 : 餌付けにはそういう魂胆があったのか  
三鈴 (うなづく)  
吉雄 芸を仕込んでいたとか  
三鈴 いいえ  
吉雄 わかった。寄ってくる輩からの護衛だ  
三鈴 はずれ  
吉雄 火の用心の  
三鈴 違う  
吉雄 じゃあ、なに  
三鈴 あのね  
吉雄 はい

三鈴 あのね…  
吉雄 どうしたの  
三鈴 お名前、なんでしたっけ  
吉雄 吉雄といひます  
三鈴 私は三鈴。三つの鳴る鈴  
吉雄 そっか、へへ  
三鈴 なあに  
吉雄 いや、ずっとね  
三鈴 ええ  
吉雄 ずっと知ってたんだ。君のこと  
三鈴 私のこと  
吉雄 へへ  
三鈴 (すんすんと泣く)  
吉雄 どうしたの、ごめん、どうしたの  
三鈴 ごめんなさい、なんだか、吉雄さんの事あんまり知らないものだから、かえ  
つて気持ちが悪くなってしまつて、私…  
吉雄 楽に、なつてゐるの  
三鈴 だつて貴方も私の事、なーんにも知らないでしょう  
吉雄 ああ  
三鈴 どんな女か、知らないから  
吉雄 知られたくないんだ？  
三鈴 それが不思議なの。知つてほしいのか、知られないままでいたいのか  
吉雄 み、  
三鈴 気にしないでね。吉雄さんのこと、怖がつたり嫌がつたりしてゐるわけじゃ  
ないの。むしろ私は…  
吉雄 気になんかしない。俺が気にするのは、君がこんな場所にて俺なんかと喋  
つて平氣かつて、そんな事ばかりで  
三鈴 ありがとう  
吉雄 いや  
三鈴 じゃあ  
吉雄 うん  
三鈴 じゃあ、そろそろ  
吉雄 小四郎もまだ帰つてない  
三鈴 でも  
吉雄 餌付けは何のため

三鈴 さあ

吉雄 犬が好きだった

三鈴 ふふ

吉雄 わかった、誰かを襲わせるため

三鈴 父さんを殺させるため

吉雄 え

三鈴 父さん殺しておくれと頼んでいたの

吉雄 三鈴さん

三鈴 驚いた

吉雄 殺すだなんて。君ら兄弟に、そいつはそんなに酷い父親なのかい。ねえ、人

殺しなんて簡単に言っちゃいけない。人を殺した奴の事、周りの奴らがどん

な目で見るか、君は知らないんだ

三鈴 吉雄さん、犬、殺すんでしょう

吉雄 (首を横に振り) それは他の奴の仕事だ

三鈴 じゃあどうして、そんな殺したかのような口ぶり

吉雄 人が死んで真っ先に疑われるのは慣れてるんだ

三鈴 そう

吉雄 鉄泉の花なのに

三鈴 え

吉雄 いや、なんでもない(恥ずかしげに)

三鈴 怖いんです。だんだんと若い頃の母に似てくる私が。子供の頃、留守番して

いてボヤを起こした。飛んで帰ったのは父一人きり。火の手が収まった頃、

寝乱れ髪で帰った母を、ご近所さんのいる中で父はどれだけ殴ったか。胸が

はだけで、母の白い乳房が砂まみれになって、私たちも泣いて、そんな父が

怖くて泣いて。しばらくしたら母は見知らぬ男と無理心中、心中…。その男

に、恋焦がれられ殺された。可哀想に、私たちの事を本当に思ってくれてい

たのは母なのに。鏡を見ると、美しかった母に似た私がいる。昔とは違う笑

顔の父がいる。もうすぐあの人は私に復讐するでしょう。母に残した恨みつ

らみを全部私に投げつける、だからその前に

吉雄 だからって

三鈴 父親放棄して、ただの男に成り下がった。父親のフリした汚い男に。あの犬

たちがいなくなってしまうから、私、が、父さんを殺さなければ

吉雄 三鈴さん

小四郎が登場し、聞き耳をたてている。

三鈴 小四郎には話せません。だって、私のこんな気持ちを知ったら、あの子悲しむわ。姉さん思いのいい弟だって、吉雄さんも分かるでしょう

吉雄 ああ

三鈴 だからね、私、我慢するの。今までと同じように何も口にせずいればいい。だって私、誰に迷惑かけたいわけじゃないから、私が我慢すればそれで

吉雄 君が苦しむことない

三鈴 そんな優しいこと言わないで。誰かに頼るの慣れてない

吉雄 ねえ

三鈴 でも私一人じゃ怖いので、吉雄さん

吉雄 それならいつそ

小四郎 ただいま

三鈴 (平然と) あら小四郎、おかえりなさい。遅かったじゃない。工場の方は大丈夫だったの

小四郎 うん、仲間の奴らが気付かないフリしてくれていて。早引け届けの行き違いつて事にしてもらった

三鈴 そう、よかったね

小四郎 うん

吉雄 よかったな

小四郎 ああ

三鈴は退室。作業場を眺め歩く。

小四郎 姉ちゃんには、写真のこと内緒にしといてくれた

吉雄 市場で知り合って、んで暇つぶしに此処にって…

小四郎 (遮り) 追っ手の奴、そんなに躍起になって探してるわけじゃないさそうだ。まあガキの悪戯とでも思ったんじゃないかな。ありがたい事さ、これで金儲けしてるって考えもしねえんだろうな

吉雄 だといけどな

小四郎 なあ兄さん

吉雄 なんだよ

小四郎 いや、へへ

吉雄 歯切れ悪いな、お前らしくもない

小四郎 姉ちゃん見た時、鉄泉って言ったろ

吉雄 そうだっけ

小四郎 どういう意味

吉雄 あんまり美人が飛び出したもんだから驚いたよ

小四郎 俺、ちよいと写真のアジトに行ってくる

吉雄 せっかくお目こぼしもらったのにかい

小四郎 大丈夫

吉雄 あんまり調子に乗ると

小四郎 知らないよ。子供だからって許してくれるさ、スイマセン童貞ゆえの出来心ですってさ

吉雄 そんなにうまくいくかね

小四郎 いかなくても。俺は今夜で最後にする。こんな茶封筒一組ずつなんかじゃなく、仕入れの木箱そっくりそのまま頂いてくる。これが何十何百と詰まった夢の木箱だ

吉雄 幾らぐらいになるのかね。しかしそんな箱、一人で大丈夫か

小四郎 一人で大丈夫だった。俺だって一人で平気さ、今までがそうだったんだから。それで、それ持って今夜の最終電車で町を出る

吉雄 え、今夜

小四郎 姉さん連れて町を出る。それだけネタがありや、新しい町に行ってもなんとかなるだろ。今まで溜めた金もあるし、だから兄さん

吉雄 なんだよ

小四郎 うまくいくよう祈ってくれよな

吉雄 ああ

小四郎 鉄泉のさ、花の匂いに誘われたって、触れないどいてくれよ

三鈴、女犬を見つける。

三鈴 あら、犬がいる

女犬は三鈴に助けを求めていいか、思案する。

再び作業場。要子と鉄雄。

要子 またうんざりする前に外行って気晴らしでもしてこようか。そう、私、今夜は踊りたいんだ。チャールストンかスウィングなんかで。鉄雄、あんた踊り  
はできる

鉄雄 まさか

要子 ちよこつと教えてやろうか

鉄雄　いーよお

要子　鈍臭いもんね。一緒に行くだけ行ってみる？

鉄雄　お、俺なんか連れてったって要子が恥かくだけだ

要子　当たり前じゃない、聞いただけよ。あんたがいたら、男どころか馴染みの店員すら寄ってこないわ。今夜は、昔みたいに色男見つけて遊びたいのよ

鉄雄　自棄おこしちゃいけないよ

要子　自棄なんかじゃないわ、私は根っからこういう女

鉄雄　そんな口きくから、吉雄も腹立てんだ

要子　あんた出てっくれないか

鉄雄　はい？

要子　邪魔だ、鉄雄、あんた邪魔

鉄雄　あ…ごめんな、要子

要子　あの写真売りだって、あんたが引き入れたんじゃないの。誰にも相手にされないからって、売り上げちよろまかして買ったんだろ

鉄雄　え、あ

要子　そんであんな女まで連れてきて。私と吉雄はさ、二人の時ほうまくやってるんだ

鉄雄　怒らないでくれよ

要子　触らないで、せっかくのよそ行きが汚れるでしょう。ねえ、帰ってよ。黙って田舎に帰ってよ

鉄雄　また石ぶつけられるってか

要子　あんたにとっちゃ、ここもあそこも一緒でしょう。それとも、やっぱり吉雄も犬を食べれば気が変わるかしら

三鈴が、要子と鉄雄の場へ。

要子　やっとお帰り？

鉄雄　弟、戻ったろ

三鈴　ええ。お世話様でした

要子　ねえ、あんたお腹すいてない

三鈴　帰ってから家族で夕飯食べますから

要子　余り物だけど食べてよ。さっきね、あんたの弟もバクバク食べてた

三鈴　悪いですよ

要子　せっかくだから。こうやって知り合えたのも何かの縁でしょう、ほら、大人気のつくね。毎日売り切れ。今日は運が良かった、はい、どうぞ

三鈴 ……ありがとう

三鈴は焼き鳥を食べる。

鉄雄 うー

三鈴 おいしい

要子 そう、おいしい

吉雄と小四郎もこの場へ交ざり。

吉雄 なに食わせた

要子 (大爆笑で) つくね!

三鈴 (微笑み) ええ

小四郎 なにしやがるんだよ! 姉ちゃんもどしな、いいからもどしちやえ

要子 食べた。この人、犬食べたよ。私らでも食べた事ないので、おいしいだってさ、吉雄、あんたこれ食べる人間許せないだろう、人種が違うんだろう。

育ちだけじゃなく、このお嬢さん、アンタとは違う人間なんだよ

吉雄 大丈夫?

小四郎 寄るな!

三鈴 少しだったから

要子 少しだったから!

吉雄 黙ってるよ!

要子 (泣き笑いで) これ食べる奴らと、私達とは違うんでしょう

吉雄 妬むな。頼むから妬まないでくれよ、お前のそういうのには、もううんざりなんだ。なにもこの人にまで当り散らす事ないだろう

要子 あーあ、あーあ! なによ! その女なら犬食べようが何しようが良いってんだ。その女ならなんでも許せるんだ、あーあ、その顔。吉雄、なんだよその顔、まるで私が食べたみたい

要子は退場。

小四郎 姉ちゃん、大丈夫かい

三鈴 大丈夫よ

小四郎 本当に

三鈴 変な子ね、本当に大丈夫よ。ねえ、吉雄さん

吉雄 え、ああ

小四郎 帰ろう

三鈴 先に戻っていて、すぐ追いかけるから

小四郎 どうして

三鈴 どうして？

小四郎 じゃあ僕も真つ直ぐ家には戻らない。戻らないけれど、必ず家で待っていて。

待っててね、姉ちゃん

小四郎、意を決して退場。

吉雄 あいつ

三鈴 どうしたの

吉雄 とめてくる

三鈴 ねえ

吉雄 はい

三鈴 私のこと

吉雄 助けてやる

三鈴 (笑んで頷く)

吉雄、小四郎を追って退場。

鉄雄 強いのね

三鈴 え

鉄雄 眉一つしかめてない

鉄雄、のそりと退場。

三鈴、置かれたエロ写真を発見する。

三鈴 あの人ったらこんな、こんな恥ずかしい、恥ずかしい写真買って。私の願いを聞き入れてくれる条件に、死んだ父さんの目の前で、私もこれと同じように笑顔向けなきゃいけないかしら。私が嫌がったとしても、父さん殺してやったからと、こんな風な格好させられて

三鈴は食べかけのつくねを口にする。

女犬 おいしいんですか

三鈴 あら

女犬 おいしいんですか、その肉は

三鈴 そんな所に捕まっていたのね、可哀想に、おいで

女犬 行きません

三鈴 おいでだったら。(女犬のそばへ寄り) お前、私と仲良しだったのに似てるね。

もしかして。覚えていない私のこと。お腹は空いてる？(つくねを差し出し)

女犬 ひい

三鈴 嫌なの。お前の気持ちよく分かるけれど、それ乗り越えて食べなきゃいけない時もあるわ。今がその時なのよ、ほら、お食べなさい、食べないと

女犬 助けて助けて

三鈴 食べないと、お前も食べられるよ

女犬 (吐きながら焼き鳥を口に)

三鈴 いい子、よく出来た、えらいえらい

三鈴は逃げ惑う女犬を抱え、赤子のようにあやす。

三鈴 雄犬に犯された事はある？

女犬 ……

三鈴 そんな事されたら噛み殺してやるのよ。お前を誰かが食べようとしたら、そ

いつら全部噛み殺してやるの。お前にはその力があるんだから。お前が従順

なのは、生まれつきではないのだからね

女犬 なんて食べさせた、なんで食べさせた、これでもう私には帰る場所も無くな

った。なんの権利があつて私から居場所奪ったの、なんで私がここに連れて

来られたか、それさえアタ知らないでしょう

三鈴 (焼き鳥を口にし、その肉へと語る) すーっと、胸の下の辺りに落ちていく。

お前の残した無念が私の思いを頑なにする、もっと私を強くして頂戴、男の

心変わりを許さない、強い女にして頂戴。ね、お前を捌いた男はね、お前の

代わりに私の犬にされるのよ

女犬 畜生

三鈴 父さんにお酒飲ませて寝付かせましょう。小四郎が真っ直ぐ戻らないのなら、

丁度都合がいいわね

女犬 自由に外へ出られない私には、尊厳がない

鉄雄、三鈴の退場を見送り女犬の傍へ。

女犬 尊厳

鉄雄、女犬の鳴き声がうるさいので、蹴る。  
そしてエロ写真を手に、しばし。

鉄雄 …股開いて、笑ってんなよお、嬉しそうにさ

鉄雄は写真を掲げ、一枚ずつ丁寧に破っていく。

吉雄が登場。

吉雄 駄目だ、捕まえられなかった

鉄雄 んあ

吉雄 小四郎

鉄雄 張り切ってたんだね

吉雄 そうだな

鉄雄 吉雄も

吉雄 んな、張り切ったところさ

鉄雄 鉄泉の花

吉雄 ああ、近くで見ると余計凄い

鉄雄 おお、しびれた

吉雄 そそるよ

鉄雄 仲良くなったか

吉雄 ああ。でも

鉄雄 なに

吉雄 いやさ、まあ、うん。賭けをしてみてんだ

鉄雄 博打か

吉雄 どうだろうな

鉄雄 うまくいくよ、吉雄、運太いもん

吉雄 へへ…(写真に気付き)

鉄雄 要子かな

吉雄 なあ、鉄雄

鉄雄 うん

吉雄 俺は冷たい人間か

鉄雄 吉雄は優しい男だ。冷たいフリをしすぎなんだ。あの子にはそんな風にして

ないだろな

吉雄 どうかな。三鈴ってんだ、素敵だろう

鉄雄 んああ

吉雄 あの子の犬だったんだって

鉄雄 区別つかねえよ、誰の犬でも、首輪もなしでなんか

吉雄 餌付けしてたんだ。あんな可愛い子が、あんな犬ども

鉄雄 デブ

吉雄 何の為だとだと思っ

鉄雄 変わってんだな。住む世界が違うってやつだ、さっき要子の犬にも話しかけてた

吉雄 要子の犬

鉄雄 いるんだよ

吉雄 何の為に

鉄雄 知らねえ

吉雄 なあ鉄雄

鉄雄 なんだよ吉雄

(両の手の平を見せ) 犬の臭いがするだろう

鉄雄 しねえよ

吉雄 いいや、分かっているはずだ。俺たちはずっと一緒に生きてきた。生まれも学校も、東京に出たのだから一緒だ。市場に屋台出そうと決めたのも、俺たち馬鹿にしてきた奴らに犬焼いて復讐してやるって笑いあったのも、あちこち働いて金貯めたのもお前とだ。俺たちは二人で同じ物を見てきた。二人だけで見えてきた、そうだろ

鉄雄 こそばゆいよ

吉雄 なあ鉄雄、俺は犬か

鉄雄 人間だよお

人間が犬になるって事はねえか

鉄雄 尻尾生えてきてねえよお

吉雄 俺があの子の犬になりたいって思うのは、俺が犬になってきてるからって事はねえか

鉄雄 なんだよそれ

吉雄 あの子の父さんを殺してやりたいって思う。あの子の餌付けしてた犬の身代わりになさ、俺の捌いた犬の代わりに。食った奴らを笑ってた、俺が、犬自身に、畜生以下に。なあ覚えてるか、要子がやって来た日の事。何年かぶりに会った要子に、やっぱり俺が言ったんだよな、面倒くらい見てやるから、こ

ここにいれば良いって  
鉄雄 あん時は感動したぜ  
吉雄 お前も捨てて行こうとしてんだよ  
鉄雄 俺も  
吉雄 うん  
鉄雄 そっかあ  
吉雄 でもな、きつとまた誰かに求められたら、次は三鈴さんを捨てて逃げるんだ  
鉄雄 なあ、吉雄  
吉雄 んで、いつか、俺がもう何の役にも立たなくなった日、その時こそ俺は自分に殺される。若い俺に復讐されて、一人惨めに死んでいく。仲間も誰も彼も捨てて、人殺しの犬になりさがった俺は  
鉄雄 落ち着けて  
吉雄 求められるまま形を変えてたら犬になっていましたー  
鉄雄 俺がいる  
吉雄 いない。俺は真っ先にお前を捨てようとしてんだから  
鉄雄 お前、犬じゃねえよ  
吉雄 捌いて売っただけなのに、応えてやろうと思っただけなのに  
鉄雄 大丈夫だ、俺が守ってやる、俺が守ってやるよ。もう誰にも、お前に指一本も触れさせやしねえ、大丈夫だ、大丈夫だ

鉄雄は吉雄を抱く。

吉雄 あはは  
鉄雄 吉雄  
吉雄 あはは、犬で十分じゃねえか  
鉄雄 吉雄  
鉄雄 鉄雄  
吉雄 なんだ  
鉄雄 女々しいな  
吉雄 んなことねえ  
鉄雄 俺、助けてやるわ。三鈴さんのこと。一度した約束は守ってやらないと  
鉄雄 じゃあ俺も  
吉雄 なんだ  
鉄雄 お前のこと、守ってやんねえと  
吉雄 守れるか

鉄雄 俺はさ、好きな奴が二人、男と女が一人ずついりや他はいらないもの

鉄雄、退場。肉包丁など手にしているといい。

吉雄 あいつん家、どこだって言ってたっけ

女犬 あの

吉雄 なんだ、そんなとこいたのか

女犬 逃がしてもらえませんか、へへ

吉雄 要子のやつ

女犬 じゃあ、殺してもらえませんか。いつもやってるんでしょう。私もほら、こ

んな所にいたくないし、ね、お邪魔でしょう。へへ、自分で死ねたっけい

ざとなると出来ないもんで

吉雄 よく吠える犬だな

女犬 ねえ

吉雄 人間捌くにゃ、どの包丁がいいのかな

吉雄は退場。

女犬は吠えることをやめる。

第三場

夜。

手負いの小四郎が登場。明かりを消す。

写真入りの大きな木箱を抱え、首からカメラを提げ、ポケットは膨らんでいる。

小四郎 へっへー。…馬鹿野郎、小四郎様をなめるんじゃないよと。(カメラ) どう

だ、思わぬ収穫、楽勝楽勝(言うわりに平気そうでなく)…大人げないよな、

子供一人を何人も追い掛け回してさ。やっぱり泥棒稼業も楽じゃないね。

でも、これだきやありや姉ちゃんやと違う町で生活を始める事ができる。二人

きりで、親父は…、明日の朝にでも分かるさ、それで後悔すればいい、俺た

ちが産まれてから、これまでの全て、思い知れ、この野郎、親父!

三鈴 すみません

小四郎 なんて

小四郎は、登場する三鈴から身を隠す。

三鈴は、少しだけ露出を多くしたり髪を気遣ったりと落ち着かぬ様子。

三鈴 どなたかいませんか、吉雄さん

吉雄が奥から登場。

吉雄 いますよ、います。ここに。あれ、真っ暗だ、切れたのかな

三鈴 いないのかと、思った

吉雄 います

三鈴 帰ったら、父さんなんだか上機嫌で、お風呂屋さんに行こうと喋っている間

に、一人でお酒飲んで眠り始めちゃった

そう

三鈴 どうしたの

吉雄 なにが

三鈴 助けてくれるのでしょうか

吉雄 ああ、助けてやる。三鈴さんを

三鈴

吉雄 三鈴を

三鈴 父さん、一人でお酒飲んで眠り始めちゃった

吉雄 そっか

三鈴 そうなのよ。小四郎も帰ってない  
吉雄 そうなんだ  
三鈴 だからそうなのよ。早くしないとかち合ってしまうわ  
吉雄 知られるのは嫌かい  
三鈴 あの子には真っ直ぐに生きてほしいの。私たちの計画が知れたら、きっとあの子、私まで信じられなくなる。吉雄さんを殺そうとするかも  
吉雄 はは  
三鈴 私、ずっと良い姉を演じるわ。父さんが死んだら毎日を泣き暮らすの。そうすれば小四郎も父さんの為に涙を流す。家族の思い出が美しく出来上がる  
吉雄 そしたら、俺はどうなるんだい  
三鈴 泣き暮らしているから、奪いに来て  
吉雄 奪うのかい  
三鈴 だって、ふふ、まさか父親を殺した男と逃げるだなんて出来ないでしょう。  
今夜、吉雄さんが私のお願いをきいてくれたら、いつでもいいわ。私、貴方に奪われるのを大人しく待っている  
吉雄 知れたら、小四郎に軽蔑されるもんな  
三鈴 軽蔑だなんて！ あの子には私の気持ちがちやんと分かるわ  
吉雄 そう  
三鈴 今までの努力を無駄にしたくないだけ。どうしたの、暗い顔して  
吉雄 俺は、君の父さんを殺して、君を奪えばいいんだね  
三鈴 そうよ  
吉雄 それからは  
三鈴 え  
吉雄 奪い去って、それからはどうするんだ  
三鈴 それは…、吉雄さんが決めて  
吉雄 どこかの町へ行行って二人で生活するのかい  
三鈴 そうよ  
吉雄 どの町  
三鈴 だから吉雄さんが  
吉雄 どこにも行った事、ないんだろ  
三鈴 だから、連れて行って  
吉雄 そうだね、君はいてくれるだけで有り難い鉄泉だもんな  
三鈴 奪い去ってくれたら、なんでもしていいのよ。私のお願いきいてくれるんだもの、私も吉雄さんの思うがまま  
吉雄 思うがまま、なあに

三鈴 いやだ

吉雄 なにがさ

三鈴 …もうすぐ私の忌まわしい何もかもがいなくなる

吉雄 親父一人だ、大袈裟だよ

三鈴 それが私の全てだったんですもの。どきどきする。吉雄さん、私、今までこれほど胸躍ることなかったわ。楽しいだなんて不謹慎かしら。でも、私とあの野良犬たちで創り上げた世界が、貴方を通してこんなに広がったの。もう悪夢を見ないで済むって、ここを出てからずっと考えてた。まだ実感は湧かない、でもきつと吉雄さんに奪われたなら私、もう自分だけで思い悩む事なんてなくなるのね。貴方の全てに従ってればいいのね。手を握って、怖いわ

吉雄 なあ、聞いてくれないか

三鈴 なあに

吉雄 いや、君に聞いてほしい事なんか何もないや

三鈴 変な吉雄さん

吉雄 一度、こう、強く抱いてもらっちゃ駄目かな

三鈴 え

吉雄 なんだか、頭が混乱してきた

三鈴 いいわよ、どうぞ

吉雄 (避け) 売女みたいな素振りしないでくれよ、もういい、とにかく

三鈴 ええ

吉雄 君の家まで案内してくれ。父さん殺さなきゃ

小四郎が慌てふためき登場する。

小四郎 相手間違えてるだろ、なにやってんだ姉ちゃん

三鈴 小四郎

小四郎 なにたぶらかされてんだよ、こんな男に。父さんを殺すだあ、一緒に逃げる

三鈴 だあ、自分の言ってることの意味、分かってんのかよ

三鈴 あんた、いつからいたの

小四郎 最初っからだ

三鈴 最初っついで

小四郎 おい兄さん、うちの姉ちゃんがなに言ったか知らねえがな、あんまり調子に乗った真似してもらっちゃ困るんだよ。俺たちの父親のことは俺たちで何とかする。姉ちゃんだって、俺が連れて行く

吉雄 写真強盗は成功したのか

小四郎 黙れ

三鈴 写真で

小四郎 姉ちゃん、俺、僕、とうとうやったんだ。姉ちゃんと二人で、もういつだってあの家を飛び出すことが出来るんだぜ。心配するかと思って黙ってたけど、僕、工場の他にもいくつか日雇いやったりさ、色々して金貯めたんだ

吉雄 健気だね

小四郎 誉めてくれよ、凄いだろ

三鈴 あんたまだ子供じゃない

小四郎 喜んでくれないのかい

三鈴 だって知らなかったんだもの

小四郎 姉ちゃん

三鈴 あんたと二人で町を出るなんてどう考えても無理よ。出来っこないわ

小四郎 なぜ

三鈴 え、どうしてもよ。だって、あんたがそんなこと考えてるなんて、思いつきもしなかったんだもの

小四郎 じゃあどうしたらいい。僕だって知らなかった事だらけじゃねえか。姉ちゃんだって、僕のためだとか言って、隠してきた事たくさんあるだろう

三鈴 やめてよ小四郎

小四郎 兄さんだって知ってたんじゃないのか。俺の姉ちゃん盗み見て、鉄泉だなんて暗号つけて、仲良くやって、俺から写真買って。腹ん中じゃ笑ってたんだろ。だから毎回律儀に買ってくれてたんだろ、馬鹿な兄弟だって、姉ちゃんと写真見比べて面白がってたさあ

吉雄 三鈴と会ったの今日が初めてだ

小四郎 へえ呼び捨てとは

三鈴 本当よ、あんただって居たじゃない。さっきたまたま、ね、話しかけられて話しかけられて？

吉雄 そう、それで

小四郎 姉ちゃんも隅に置けない。こんな肉屋と仲睦まじく

三鈴 いい加減にしなさい

小四郎 まあ、父さんに每晚抱かれるよりマシか

三鈴 (小四郎の頬を打ち) なんてこと言うのよ！

小四郎 知らないフリしてきたんだ。姉ちゃんが誰にも言えない秘密だと思ってきたからさ。誰にも言えない秘密だと思っていた。なのにどうして僕以外の奴に話しちゃうんだよ

三鈴 あんた、姉ちゃんになに言ってるの  
小四郎 父さんじゃなく、この男なら我慢できるのか

三鈴 子供のくせに、キチガイ！

小四郎 こんなに稼いでも、どうして一人前だと認めてくれないのさ！

小四郎が暴れるかして、女犬が自由になる。逃げ出す女犬。

しかし登場する鉄雄に押し戻され転がる。

鉄雄は包丁を片手に要子を担いでいる。興奮し、なにか声を出している。

鉄雄 吉雄

吉雄 どうしたんだ、お前

鉄雄 要子探しに行ったらさ、こいつダンスホールで絡まれててさ、美人だからい  
けねえんだけど、いひひ、助けに入ったら、こいつもギヤアギヤアうるさく  
て、すったもんだしてたら俺の持ってたこれ、相手に刺さってよ。どうした  
もんか迷ったけど、そのまま逃げてきた

吉雄 またかよ。怪我ねえか

鉄雄 ねえよ、でももう駄目だあ

小四郎 相変わらず気味の悪い男だなっ。さあ姉ちゃん帰ろう、それで僕と町出よう

鉄雄 まあ待ちなつて。そっちの鉄泉ちゃんもさ、そんなに焦らないで

三鈴 触らないで！

鉄雄 そうそう、俺はいつもそう言われる

女犬が再び脱出を試みるが、鉄雄が踏みつけて逃がさない。

鉄雄 こいつさ、要子がお前に食わせようとして捕ってきたんだぜ。いじらしいっ  
てのは、こういう事だ。でもさ危ないとこだったな、吉雄、女あみんな畏張  
ってんだ気をつけろお

吉雄 畏かい

鉄雄 俺、吉雄を助けるぜ。あんな風に、お前が俺に助け求めた事なかっただろ。

辛いんだろ、可哀相にな。それでどうだった、この子は、お前の想像超える  
こと出来たか

吉雄 三鈴は

三鈴 吉雄さん

鉄雄 その子は犬を食べる側だぜ

三鈴 犬なんて

吉雄 (三鈴を見やる)

鉄雄 もう一度言うな、その子は、犬を、食べる側だぜ

吉雄 (鉄雄を見やる)

鉄雄 やっぱりいつでも現実には俺たち二人だけを裏切るんだ

吉雄 この子はね、俺に殺させて、奪わさせて、最後にや食わせてもらおうとして  
いる。可愛いものだろ

鉄雄 吉雄が捕まったら、私は知りませんって顔するか

吉雄 泣きながらするさ

鉄雄 やっぱり、やっぱり!

吉雄 それでもなお、この子の望みを叶えてやりたいと思うのは、なぜなんだろう  
ね

鉄雄 分かったんだよ、俺!

吉雄 はは、本当かよ

鉄雄 おい小僧、柳通りの十字路でヤクザが押し入り強盗探してたぜ。エロ写真を  
かつぱらって逃げた奴、エロ写真まみれの人間を見なかったかって、あれお  
前だろ

三鈴 あんた、そんな事までして

小四郎 それで

鉄雄 言つといた、ちゃあんと言つといた。たぶん向こうの原っぱにいますよーつ  
て。もうすぐ来るぜ、ピカピカの車に乗った奴もいた、鉄砲持った奴もいた、

お前を追って何人もヤクザ

小四郎 馬鹿野郎、姉ちゃん急いで逃げないと

三鈴 え

小四郎 まずいよ、どうしよう、あそこにや変な学生しかいなかったんだぜ。ヤクザ  
だなんて、俺、殺されちまうよ

鉄雄 殺さりやしないよ、エロ写真ごときで。片輪だ、カーターワー

小四郎 (三鈴に掴まれた拍子に、ポケットから札束がゴロゴロ落ちる)

三鈴 …あ

小四郎 (慌てて札束を拾い上げる)

鉄雄 (爆笑)

吉雄 こりやすげえや

小四郎 違う、違うよ姉ちゃん

鉄雄 駄目だよ女連れて逃げちゃ、重いよ、俺だってここまで着くのにヘトヘトに  
なったんだから。甘いつて考えが。女なんて足手まといに決まってる。なあ  
吉雄、その子にはもう少ししてもらいなよ

吉雄 なぜ

小四郎 姉ちゃん

三鈴 あんた、強盗までやったの。そこまでして父さんの所から逃げたかったの  
小四郎 違う

鉄雄 ほら、要子もそろそろ起きて

吉雄 なにがしたい

鉄雄 お前のしたい事、俺もしたい！

吉雄 なんだよ

鉄雄 もう、俺たちはこの町にや居られないよ。俺と、要子と、その坊やはもう、  
ここにはいられない。今頃全員追われてる、捕まったら見せしめだ、無事じ  
やいられないだろうなあ

吉雄 なら、逃げるしかねえじゃねえか

鉄雄 違うよ、お前とその姉ちゃんは平気だ。俺さ、お前助けるために、そういう  
風にしたんだもの。これでお前は何も苦しまずに、そのお嬢ちゃんとの暮ら  
しをしてみればよくなったじゃないか。だって俺らはここに居られないんだ  
もの。お前はその子を奪いたかつたんだろ、でも型ハメられるのは嫌なんだ  
ろ、背負ったつもりが捨てられるかもって怖がってたもんな。人殺ししない  
と手に入らないなんて、そんな高価な女なのか。ね、そいつにや価値なかつ  
た、つまんない女だった。やるこたねえ、お前ほどの男がやるこたねえよ。  
人殺すより、もつとする事あるだろ。吉雄、何が欲しくて殺してもいいって  
思った。何が欲しくて！ 見返りなんて優しいこと言っていないで、吉雄は自  
分のしたいようにすればいい、俺もそうする。俺、ずっと要子が好きだった  
んだ。こいつ美人だよ、肌も綺麗だ。でも性格きついし、第一俺を犬より毛  
嫌いしてる。お前に惚れてんだもん仕方ないか。でもお前がいなくても俺に  
や惚れない。俺ね、お前に惚れてるってどこも気に入ってた。まあとにかく  
く、お前とこの女といてみれば…

三鈴 なに言ってるの、この人

鉄雄 うるせえぞアマあ、おい小僧、死にたくなかったらお前はさっさと逃げろ、  
ぐずぐずしてつと俺がお前を刺し殺すぞ

吉雄 鉄雄

鉄雄 吉雄

吉雄 行くぞ、荷物まとめろ

鉄雄 え、なんで

吉雄 また始めつからやり直すんだよ

鉄雄 駄目だよ、せつかくここまでできたのに。お前はいつも、俺が羨む男でいる

んだらう。ならその子と、見栄えだけでも欲しかった理想の鉄泉と仲睦まじく暮らしてみせてよ

吉雄 誰の話だ、それ

鉄雄 この見栄え、素敵じゃない

吉雄 素敵だね、本当に。ただこいつ根っこもないし、喋るんだよなあ

鉄雄 吉雄、俺、本当にお前とまた行けるのか

吉雄 それしか手はねえよ、急ごう。追われてるんだろ

荷造りを始める吉雄と鉄雄。

女犬 噛み殺せ

三鈴 吉雄さん

吉雄 また誰か探せばいいじゃないか。それがいい、君のしたかったのは結局そういう事だろう

要子 (目を覚まし) なに、逃げるの。私は嫌だからね、こんな、鉄雄とまた一緒に行くなんて。さっきダンスホールでこいつ

吉雄 知らないよ、お前なんて。俺たちは二人で行く

要子 なに言ってるのよ、私だって追いかけてまわされたんだから

吉雄 知らねえよ。あ、鉄雄、お前は要子もいた方がいいか？

鉄雄 触っても、怒らねえか

要子 気持ち悪いこと言うな！

吉雄 お前だろ(要子を突き飛ばす)

要子 ちよつと、ねえ、え、なに、待ってよ。吉雄、あんた私の面倒見てくれるってさあ、嫌だよ、置いていかないで、お願いだから連れてってよ。なんでもするから、なんでもするよ、私！

吉雄 じゃあさ、鉄雄と寝てやれよ

要子 …ああ、それは

吉雄 一回ぐらい寝てやれって。どうせ誰にだって開く股だろ

要子 …(頷き) そうだったね、忘れてた

吉雄 じゃあ仕方ねえな

要子 金、用意しとけよ、鉄雄！

吉雄、鉄雄、要子は颯爽と退場。が、吉雄は踵を返し

吉雄 なあ小四郎、こういうのはどうだ。俺たちの餞別に、その金よこすってのは

小四郎 これでも俺も逃げるんだ、俺たちも

吉雄 そうか。じゃあ俺たちの軍資金代わりに、そのカメラでお前の姉さんの写真撮らせるってのはどうだ。この町じゃ売らねえから

小四郎 駄目だ、やめろ（カメラを奪われ）、これ（木箱）全部やるから

吉雄 いらねえよ、どうせブスばっかだろ

鉄雄 （も、戻り）なにしてんの早く早く

吉雄 鉄泉の写真撮るんだよ

鉄雄 記念にか

吉雄 そうだ、記念写真だ

小四郎 分かった、金渡すから。悪い冗談やめてよ兄さん

鉄雄 そんなもん持ってたなら、捕まった時に殺されるもの

吉雄 それもそうだ。俺たちは、田舎出た時と同じように、また違う場所で始める  
さ

逃げる三鈴、追う吉雄と鉄雄は楽しげに。

小四郎は追おうとするが、腰が抜けて立ち上がれない。

要子 （も、戻り）あいつら何やってんの、奥？

小四郎 行くな！

要子 何してるの

小四郎 さあ。花に、鉄泉の花に水やってんだろう。んで、茎を折ってさ、…飾る気なんだ。…お前ら追われてるんだろう！ 早く行けよ！

要子 あんたもでしょう

小四郎 俺は、追われているから出て行かないんだ。ここからもう出ていかない！

鉄雄 なんで俺から逃げるんだよ

吉雄 お前が暴れてどうすんだよ、鉄雄

要子 吉雄

小四郎 女は出て行け！

小四郎は要子を退場させる。そして、木箱から写真束を取り出し。

小四郎 僕の手から伝わる、この焼付けの妄想が、男の力となり僕の目の前の現実を凌駕します。ああ、この股開いて笑ってるのは姉ちゃんその人だったのか。写真撮ってたのは父さんかい。写真製造工場は僕らの幸せな平屋一戸建て。僕はそれに気付かず、知らない男にこれ売ってしまいました。そんな金じ

や、姉ちゃん旅立ちたくないのはもつともだ。僕はこれから追われるのでしよう。ヤクザから、誰も彼もから追われるのです。そう思うと、この気も狂わんばかりの悲鳴に悲しむことすら出来なくなってしまふんです。おかしいな、聞こえないよ姉ちゃん。もつと叫んで。ごめんね、姉ちゃん、そして見知らぬ貴女。見殺しにする主犯格の僕を許して下さい

小四郎は手でカメラを作り、あちこちを激写する。

小四郎 叫びながら、貴女がたは喜んでいるのですか。自分の手を汚さずに、男たちに翻弄され泣くことがそんなに楽しいですか。この写真たちのように。フィルムの方に笑顔を投げかけ、股を広げ、笑顔の貴女は見られることにそんなにも多くの幸せを感じるのですか。売っていたのは何、売っていた僕にすら分からなかった貴女の正体は何。ねえ、見られることって楽しいですか、幸せですか、見られないことより恐ろしいことが無いって、そんな馬鹿な話あるか

そして静寂。鉄雄が登場。

鉄雄 煙草、めぐんでくれよ

小四郎はもじもじと。失禁したようだ

鉄雄 おい吉雄、傑作だ傑作

吉雄登場。

小四郎は、吉雄が持つカメラを奪って死守する。

鉄雄 どうする

吉雄 いいよ、楽しかったから。行こう

鉄雄 …うん！

吉雄 またな、小四郎

三鈴が登場、小四郎の傍に寄らない。

小四郎 姉ちゃん、なんで舌噛み切って死んでくれなかった

三鈴 小四郎

小四郎 さようなら。姉ちゃんに望まれないのなら、僕は一人で家を出る。僕はこの写真を売るたびに、さっきの姉ちゃん思い出す。喜んで、股開いた姉ちゃんを切り売って生き延びる。悪いね、姉ちゃんの形見を僕が食うために男らにバラ撒いてさ。でもそんな犠牲を払うからこそ僕は飯が食えるんです。楽してご飯は食べられません

三鈴 馬鹿なこと、言わないで

小四郎 馬鹿じゃない！

三鈴 それじゃあ、あんた。あいつらと一緒にじゃない（笑う）

小四郎 あ、…そうか

三鈴 小四郎、あんたの目、きらきらしてるね

小四郎 潰そっか

三鈴 ううん。あんたが自分で盲になってみせたって、私の惨めさに届くわけないもん

小四郎 姉ちゃん、僕たちここで二人きりで暮らそう

三鈴 そうね、それでもいいわ。もう私、男相手に笑ってみせるの疲れちゃった。

もう、ねえ、笑わなくていいでしょーお

小四郎 うん

三鈴 そうだ、ねえ、そのカメラでもっと私を撮りなさい。それでヤクザに許しを請うのよ。お金もまだ使ってないんでしよう、たくさん売ってもらいなさい、父さんにさえ届くくらい。ね、お姉ちゃん綺麗でしょう、きつと人気が出る、だから、そしたら誰にも追われることがないわ、姉ちゃんポルノスターになるの

小四郎 うん、そうだね。なろうね

小四郎がカメラを向けると、三鈴は笑顔で股を開き。

「僕は、若き頃を思い出すたびに、見たこともない、こんな惨めたらしい悲しい絵で記憶がとまる。姉の言った言葉が、僕の若き頃を本当に終わらせてしまったのだろう。あの時の僕は、今もあの小屋の中で、あの時のまま、あの思いを抱き続けているのだろう。年をとり、僕ら兄弟が別れ、音信不通になった今でさえ、あの小屋で二人、夢のような、箱庭のような、自家発電を繰り返して」

女犬 わんわんわん

三鈴 小四郎、ここんどこ、母さんの顔に見えてこない？ お鼻あ、お口い

小四郎 えへへ

三鈴 もっと撮って撮り逃さないで、よそ見している暇はないのよ、もっと、ほら

姉ちゃん、なんでもアンタの要望心えてあげる

小四郎 僕ね、今、とても幸せだよ。姉ちゃんが僕しか見ていないから。ああ、もっとここを見て、見て笑って。…へへ。そうだ姉ちゃん、腹、減ったかい？

小四郎は、女犬を見る。

女犬 畜生！

暗転。

明かりがつくと、いつのどこかは分からないが馬麻が。後日談のような。

馬麻 そんな見ないでってば、んなね、今度も色つけてよ。そうしないと私ら生活あがったりだから、あはは

幕